

「頼政」のことなど

千里金蘭大学教授

生形 貴重

―以仁王事件の発覚―

治承四年（二八〇）五月十五日の夜、都の政界に衝撃的な噂が流れた。後白河法皇の子、高倉宮以仁王（仁平元もちひと）治承四（四）の流罪が決定したのだ。

当時の公卿であった藤原兼実（かねざね久安五）承元元）の日記『玉葉』によると、夜に入つて都が騒然とし、比叡山延暦寺の僧兵たちの下洛かと噂が一時流れたが、しかし、それが噂に過ぎないことが判明した後、「今夜、三条高倉宮（院第二子）、配流云々、件宮八条女院御猶子也、此外、縦横之説雖多、難取信」（今夜、三条高倉宮、後白河院の第二子を配流するということだ。この宮は、八条女院（白河院皇女璋子内親王）の猶子である。この他に様々な噂が流れたが、いずれも信じられないことだ。）と記されている。おそらく、都では以仁王流罪の決定は、寝耳に水のようなニュースであったと思われる。この時点では、以仁王事件の背後に源頼政がいるとは、まだ誰も想像していなかったのである。

さて、この前々年の治承二年（二七八）は、反平氏のクーデタ

―計画であったいわゆる鹿谷事件も前年には決着しており、清盛の娘建礼門院の懐妊と出産（安徳天皇の誕生）があり、誕生した皇子を皇太子の位につけるなど、平氏一門が着々と政權基盤を築いている年であった。

しかし、翌治承三年（二七九）は、清盛の嫡子で平氏一門の後継者であるはずの重盛が七月に死去する。重盛の存在は、当時政治的な対立を深めていた後白河法皇と清盛との仲介者であったが、重盛の死によつて、両者の政治的な対立は避けがたい状況となつていた。重盛の死をチャンスとばかり、院政の権威を奪還しようとしてか、後白河法皇は露骨とも思われる挑発的な政策に打つて出るが、そのことが清盛の怒りに触れ、その年の十一月には、清盛によるクーデターが行われ、政界の反平氏勢力は一掃され、後白河法皇も鳥羽離宮に幽閉された。そして、翌治承四年となり、清盛は、二月には高倉天皇を讓位させ、孫の安徳天皇を即位させたのである。いわゆる平氏政權の成立である。

政權成立を誇示するように、讓位した高倉上皇は、おそらく清盛の要請であろうが、平氏のあがめ奉る厳島神社に四月

に御幸する。これには、延暦寺などの反対もあったが、あえて
厳島に上皇が讓位後初の御幸をすることで、平氏政権の発
足を誇示する政治的な意図があったものと思われる。この御
幸によって、清盛の心境も落ち着いたのか、前年から幽閉の身
であった後白河法皇は、翌五月十四日に解放された。

冒頭に述べた以仁王の配流決定は、この翌日の夜のことであつた。いわば、反平氏勢力を二掃した後、安徳天皇を擁立して政権を盤石にしたと思つた瞬間、平氏政権へのクーデター計画が露見したというのが、以仁王事件の始まりであつたのだ。

— 頼政の戦略 —

以仁王（高倉宮）は、「王」とのみ記されているように、皇位継承権を持つ「親王」ではなかつた。『平家物語』には「継母建春門院（清盛の妻の妹、高倉天皇の母）の嫉み」によつてとあるが、当時高倉天皇を擁立しようとしていた平氏一門から疎まれて、親王の位を受けることなく政界からは押し込められていたのだ。

『平家物語』では、高倉宮以仁王の背後についてはあえて語ることがしていないが、以仁王は、母親は身分が低かつたものの、故近衛天皇の後（藤原多子）、すなわち近衛河原の大宮の

御所で十五才で元服したといわれている。この元服は、実は彼の異母弟高倉天皇が親王になる直前であり、高倉天皇を擁立しようとしていた平氏勢力の側からすれば、将来のライバル登場としての危険な事態であつたのだ。この元服の直後に、大宮多子は出家しているし、四ヶ月ほどの後には高倉宮の叔父も免職させられている。このように、高倉宮の存在は、平氏勢力にとつてはずっと以前に片づけたはずの政治的な危険要素なのであつた。

さてさらに、以仁王の兄弟を見てみると、帝位に就いたのは二条天皇と高倉天皇であるが、後の二人の弟については、円恵法親王・守覚法親王で、ともに出家の身である。本来はこの二人と同様に、以仁王も子供の頃比叡山に入り出家するはずであつたが、出家・得度しないままに元服したことになり、ここにも彼の下に将来反平氏勢力が結集する可能性が生まれたのだ。その以仁王が三十才になるまで「親王」になれなかつたのには、平氏政権樹立という歴史の流れが背景にあつたのだ。

さて、冒頭に述べたように、表面的には前年の清盛のクーデターによつて反平氏勢力が二掃されたかに見えた治承四年、しかも高倉上皇の厳島參詣も終わり、後白河法皇の幽閉も解かれたという時期に、源頼政によつて、この以仁王を擁立しての反平氏政権運動が密かに進行していったのであつた。

鎌倉幕府の正史である『吾妻鏡』では、事件発覚の一月前に

頼政が以仁王から平氏追討の令旨りょうじを受けて、源行家をして

諸国の源氏に蜂起を促させたのが事件発覚の一ヶ月あまり前であるから、頼政が反平家のクーデター計画を、以仁王を擁して実行に移し始めたのは、やはり治承四年の春の頃であっただろうと思われる。折しも安徳天皇が即位し、譲位した高倉上皇が厳島神社に御幸するころ、計画が実行に移されていたのだろう。

頼政の戦略は、以前に未遂に終わった後白河法皇側近たちの鹿谷事件のような、北面の武士勢力にたよったものではなかった。頼政は、当時源氏の生き残りの棟梁として、諸国の源氏に決起することを促すという戦略を持っていた。しかも、諸国源氏の蜂起の前には、おそらく三井寺や南都興福寺の勢力とも連携して、平氏政権の包囲網を形成しようとしていたようだ。このことは、計画が未然に露見した後、まず以仁王を三井寺に脱出させ、つづいて頼政一門も三井寺に合流して、山門延暦寺との連携には失敗するものの、奈良に向けて脱出した経緯や、南都の勢力が協力したことなどからもうかがえる。

頼政には、たしかに平氏政権打倒のためのスケールの大きな戦略があったようだ。そして、その戦略を実現させる切り札が高倉宮以仁王の存在であったのだ。

― 夜明けの戦いとしての宇治合戦 ―

密かに進んでいた頼政の計画であったが、思わぬ所から発覚して事態は激変した。三井寺で以仁王と合流した頼政は、以仁王とともに奈良に脱出をはかる。三井寺と南都の宗教勢力によつて都を南北から包囲しつつ、諸国の源氏蜂起を待つことにしたのだろう。しかし、奈良への脱出には、以仁王の体力がもたずに、宇治の平等院で一時休息を取ることとなる。ここに、追手の平家の軍勢が到着し、頼政一族は死を決して防戦に努め、以仁王を奈良に逃がそうとしたのであった。壮絶な戦いが平等院で練り広げられ、頼政一族は滅亡する。以仁王も、奈良に後一歩というところで殺害され、頼政と以仁王との反乱計画は鎮圧された。

しかし、頼政の戦略は、その死後も生き続けた。たとえば、清盛はその後、宗教勢力の危険を熟知して都を福原に遷都し、再び都を京都に戻した後、三井寺や興福寺・東大寺を焼き滅す。この清盛の行動は、頼政の戦略に突き動かされての行動であるとも解釈できるのだ。とともに、頼政たちが託した平家討伐の願いは、東国の頼朝・北陸の義仲に引き継がれて、源平の騒乱の時代に突入するのだ。『吾妻鏡』が歴史の夜明けを、頼政と以仁王との平家打倒の運動から書き始めるのは、頼政の反乱がたんなる事件ではなく、鎌倉時代の世の夜明けとして位置づけられているからだ。

『平家物語』も、この宇治川の合戦、平等院での戦いを大変誇張して描いている。つまり、平家の軍勢二万余騎、それに対する頼政の軍勢千騎という戦いとして物語っているのだ。この数の誇張表現も、そして橋合戦での源平の戦いぶりのこぎみよさも、すべては時代の夜明けを感じさせる表現になっているのだ。それほどに頼政の戦いは、歴史的な意義を持った合戦であつたのだ。

— 頼政の無念 —

治承四年の五月二十六日が宇治川合戦、平等院の合戦の日だ。実際の合戦は、数でいえば『平家物語』の軍勢の数にはお呼びも付かない。先に引用した兼実の日記『玉葉』によると、平家の追討軍は三百騎あまりで、頼政の軍は五十騎ほどであつたということだ。しかし、その戦いぶりは激戦であつて、『平家物語』が語るように、平等院に立て籠もつた頼政軍が宇治橋の橋桁を引いて防戦したこと、宇治川を源氏軍が渡つて激戦が繰り広げられたことなどは充分確認できる。(ただし、日記では、宇治川を渡つたのが忠清以下十七騎で、宇治川の水も深くはなかつたとある。)

頼政の軍勢の戦いぶりは、『玉葉』には、「敵の軍、僅かに五十余騎、皆以て死を顧みず、敢えて生を乞う色無し。はなはだ甚だ以て甲こ(剛)なりと云々。其の中に、兼綱かねつな(頼政の子息)の矢前やまきに廻る者

無し。宛あたかも八幡太郎のごしと云々。」(原文は漢文)とリアルタイムに記されていて、彼らの奮戦がいかにすさまじかつたかが推測できる。後に、『平家物語』のダイナミックな合戦描写に展開していくのもつともなことと頷けるほどである。

頼政たちの奮戦は、死を賭して以仁王を逃そうとするものだったと思われる。六倍もの数の軍勢、しかも平氏軍の精鋭部隊の突入を受けての戦いだから、いまでいえば、戦鬪の特殊部隊同士の戦いであつて、おそらく目を背けるほどの凄惨な場が繰り広げられたことだろう。

『平家物語』でも、傷ついた頼政が、郎等の武士に首を打たせようとするが、主人の生きた首を打てない郎等が「ご自害の後」に」と懇願する場面は、いまま人々の心を打つ。そして、辞世の歌「埋木うもれぎの花咲くこともなかりしに 身のなるはてぞかなしかりける」は、永年昇進もできずに四位の位に甘んじて、やつとことで公卿になれた彼の人生と重なり、無念の心が伝わってくる。せめて、以仁王さえ奈良にたどり着いていたならば、少しは頼政の無念も晴れたことであろう。頼政の無念は、この世への執念となり、平等院に伝承されていたと思われる。

— 謡曲「頼政」 —

ところで、『平家物語』は、平曲(平家琵琶)という芸能によつ

て、多くの人に享受された。観阿弥・世阿弥父子が活躍する頃には『平家物語』はたいへん流行して、物語の合戦談やその主人公たちは、ある程度古典文学の主人公としてイメージされていたようだ。世阿弥が能楽論の中で、修羅能について「平家のまに書くべきだ」と論じているのは、そのような人々のイメージに広がった物語の印象を題材にせよという意味だろう。

しかし、修羅能に限らず、世阿弥が完成した夢幻能は、基本的には幽霊能であるから、ワキに当たる旅の僧によって、そこに出現した亡霊が生前の思いを語り成仏するという、民俗的な演劇の枠組みから成り立っている。「頼政」の場合、特に老武者（老体）の修羅能（軍体）であるから、台本を作るのも、また演じるのにもおそらく大変な困難が伴うだろう。『平家物語』には語られていないが、平等院には寺の伝えとして「扇の芝」というところに亡くなった頼政の伝説があり、そのような寺の伝承も台本の下敷きにあつたと思われる。

また、頼政の上演には、頼政の名が冠せられた独自の面おもてが使用され、頭巾ずきんをかぶって演じられる。この扮装も、とくに独特の目を見開いた面の迫力も重なってか、特異な印象を受ける。いわば、扮装からは、亡霊としての一種の迫力が伝わってくるのだ。しかし、後半の演技は、床机に座って演じるという、抑制を効かせた迫力の演技が要請されるので、シテを演じる人は、頼政という物語の人物への同化とともに、永年の稽古によって培われ

た演技力を出し切るのに、たいへんな努力がいるだろう。

「金泥が施された妖気漂うような面に、頼政の無念を偲びつつ、独特の演出であるこの曲の上演の中に、『平家物語』を重ねて鑑賞するのは、見る側にとつても心の準備を求められそうだし、ひさびさに見る能舞台に、いかなる頼政が彼方の世界から蘇ってくるのか、楽しみにしたいものである。